

## 中学校体育におけるアダプテーション・ゲームの実践

村瀬浩二（和歌山大学教育学部教授）

海南市立巽中学校 西脇公孝教諭

### 【目的】

アダプテーション・ゲーム (Henninger & Richardson, 2016) は、「誰もが全力で参加できること」を目指し、ルールを調整（アダプテーション）するゲームである。従来、学校体育の現場では、運動の苦手な生徒のためにルールを調整する方法が多く行われてきた。しかし、運動の苦手な生徒はこのような調整を行っても、やはり積極的に参加できないことがある。また一方で、あまりに簡単な用具や種目にしてしまうことで、運動の得意な生徒が手加減するといった「吹きこぼれ」を生み出すことがある。このような状況を調整するために考えられたゲームが、アダプテーション・ゲームである。このアダプテーション・ゲームでは「負けたチーム」が、教師の提示するルール調整リストから適切なルールを選び、「勝ったチーム」に要求する。これによって「全員が思いきり参加できるゲーム」を目指す。ルールのアダプテーション（調整）内容は、教師によってリスト化される。例えば、サッカーであれば、ゴールを広くする、タッチ数を限定（1タッチまたは2タッチ）する、ネット型であればボールタッチ後すぐにエンドラインを触る、コートを狭くするなどである。この調整リストから生徒自身が適切な要素を選ぶことで、自身のチームと相手チームの能力を比較し、自身のチームの短所や長所を意識し、短所を補う方法や長所を伸ばす方法を考えることができる。また、このような調整を単元のなかで実践することで、自身のチームを理解し、適切なアダプテーションを要求できるようになる。このように、ゲームの調整を生徒自身が行うことで、思考力・判断力・表現力を育み (Richardson, 2013)、生涯スポーツ場面で再生可能なスポーツへの参

加能力を育成することがアダプテーション・ゲームの目的である。

さらに梅澤 (2019) は、より個人化したアダプテーション・ゲームを提唱した。例えば、車椅子の A さんの持ったボールは、5 秒間取りに行けないなどである。また、このようなルール調整は複式学級においても行われる (村瀬, 2018)。それは人数の少なさや、学年差による技能差によって、勝敗よりも「全員が楽しめる」ことを重視する雰囲気を生み出し、子ども自身がゲームの調整を行う。つまり、これらは様々な「差」子ども自身によって埋めようとする営みである。

このような調整は、性差により体力差が明確となる中学校においてより必要となるであろう。そこで、海南市巽中学校の 2 年生バスケットボール単元において、アダプテーションを取り入れた。

### 【方法】

海南市立巽中学校において、2019 年 1 月～2 月に賭けて実践された男女共習のバスケットボール単元において、アダプテーション・ゲームを実践した。

### 【文献】

Henninger M.L. & Richardson K. P. (2016) Engaging Students in Quality Games. *Strategies*, 29:3, 3-9.

梅澤秋久 (2019) 豊かなスポーツライフにつながるアダプテーション・ゲームの提案. 体育科教育 1, 36-39.

Richardson. K.P. (2013) Modification by adaptation. in Ovens, A. (2013) *Complexity Thinking in Physical Education*. Routledge.

村瀬浩二 (2018) 複式学級に見るインクルーシブ体育. 体育科教育 9, 64-66.